

「しょうはい、すわれ。」

しょうはいさんはじゅぎょうのときも教室中を歩き回っている。チヨークがすきでみんなのつくえにをかいていく。みんなしょうはいさんがかいたあと、だまってチヨークでかかれたものをけす。だれもしょうはいさんにおこったりしない。

四年になって、新しく来た先生が、

「しょうはい、何も言わないの。」

と言ったとき、だれかが

「しょうちゃんにおこってもしょうがなないもな。」

と言った。それが、みんなの気持ちだと私は思っていた。

ところが、ある時のせきがえて、しょうはいさんのとなりがみきさんになってから変わった。

みきさんはじゅぎょう中、しょうはいさんがたちあがろうとするとき

「しょうはい、だめや。すわれ。」

と言って、おきつけてすわれせうとした。みんなおどろいた。みきさんよりずっと体も大きくて、力も強いしょうはいさんが一日に何回もせきにつれもどされた。みきさんはしょうはいさんにとてもきびしい。はじめはいやいや自分のせきにもどっていたしょうはいさんだったけど、すわった後もだんだんにごこするようになった。そのよつすを見て、みきさんまににごこしていた。

それから、みんなもしょうはいさんに注意するよつになった。

ある日、しょうはいさんが午前中ずっとすわっていた

て、五限目に立ち上がろうとした時、先生が

「しょうはいさん、四時間ずっとがんばっていたもん

ね。」

と言ってしょうはいさんの頭をなでた。わたしも「しょうはい、よくがんばったな。」って思った。「一日すわっているのもたいへんだ。ときどきチヨークで遊んだっていい。」とも思った。

その時だ、

「しょうはい、すわれ。」

というみきさんの大声が聞こえた。

「そんなにきびしくせんかて、ときどき、しょうはい、

あるいたって、いいがいね。」

とひろしさんがさげんだ。

「そんなこと言うたら、しょうはい、いつまでたっ

てもすわらんよ。」

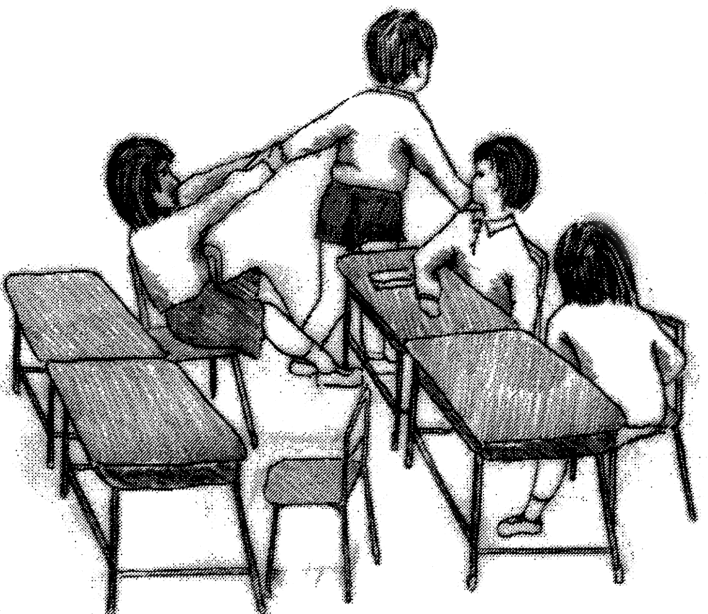
みきさんが負けずに言いかえた。ひろしさんも

「しょうはい、がんばっているよ。」

と言いかえた。そして、二人ともだまってしまうた。

わたしは、みきさんとひろしさんのどっちが正しい

のかわからなくなった。



# 「しょうへいすわれ！」（小学校中学年向け）

## A 教材設定の意図

クラスの中には様々な個性を持った子がいる。

子どもたちが共に生活して行く中では、その個性がぶつかり合い、当然、対立、反目なども起こってくる。そうした子どもどうしのぶつかり合いは、逆に互いの思いを出し合い、分かれ合い、子どもどうしがつながるための大切な契機である。

もし、クラスの中にぶつかり合い、せめぎ合いのないまま時間が経つと、表面上静かで落ち着いたクラスに見えるが、実は子どもたちはほんとうの自分が出せず、お互いの思いがわからない状態が続いている。子どもたちは、お互いに対して不安や不信を抱えたまま、自分のつらさも喜びも出し切れず、つながりも居場所もないまま、狭い教室での生活を強いられるのだ。

例えば、「障害」をもった子どもが学級にいる場合、教師は得てして、その子どもを保護しようという強い気持ちにとらわれる。「特別な配慮を要する子ども」を「保護」することは教師として当然のこととらえる。

その子へのいじめが起こらないか、みんな優しく接しているか、という一面的な見方で見てしまいがちである。

そうした見方が子どもたちのぶつかり合いを妨げることになるのである。

しかし、実際には様々な子どもたちのぶつかり合いの中で、仲間の行動を心から心配し、わがことのように悩み、勇気を持って発言する子が必ず出てくる。そうした場面を教師はとらえて、子どもどうしの互いの思いを出し合い、受け止め合う場とし、子どもたちをつなげていってほしい。

本教材のように、クラスの子に対する差別的な見方を見つめ直しながら、子どもたちがぶつかり合っていく姿にふれることで、人とつながるには、本気で思いをぶつけ合い、互いの思いを受け止め合うことが大切であることを、子どもたちに気付かせたい。

## B 教材の解説

本教材で学級の子どもたちがしょうへいさんのすることにながまんしてだまっていたのは、「やさしく接してあげよう」とする周りの大人たちから教えられた「心がけ」「配慮」からくる行動である。しかし、その裏にあるのは「しょうへいちやんにおこつてもしょうがないもん」という言葉に表れているように、「言ってもわからない子」であるという決めつけ、差別的な見方に他ならない。

そんなクラスにあつて、みきさんはしょうへいさんにもわ

かるはずと考え、「しょうへい、だめや。すわれ！」と真正面からぶつかり合っていく。そして、それに応えるしょうへいさんの姿を見て、クラスの子どもたちもまたしょうへいさんに対する見方を変えていき、しょうへいさんに注意するようになっていく。

そして、ついにしょうへいさんの行動をめぐって、クラスで本気のぶつかり合いが起こる。四時間がんばつてすわっていたしょうへいさんにさらに「しょうへいすわれ」というみきさんと、「そんなにきびしくせんかて」「しょうへいがんばつとるよ」というひろしさんのぶつかり。どちらもしょうへいさんのことを真剣に考える中から出た言葉である。そして、「どっちが正しいか分からない」という「わたし」もまた真剣にしょうへいさんのことを考え、悩んでいる。

本教材の子どもたちの変容を追い、真剣に友だちのことを思いぶつかっている姿を確かめ合う中で、仲間のことを本気で考えることのすばらしさを感じとり、自らの生活を振り返らせた

## C 指導上の留意点

・「障害」をもつ子ももたない子も、一人ひとりお互いのことを本気で考え、発言し、ぶつかり合うことが、お互いを尊重し合うことになる、ということを確かめ合いながら、現在の学校やクラスの状態に照らし合わせて学習を深めたい。

・実際にクラスや学年に「障害」を持った子や差別的な見方

## D 参考資料

- ・「仲間とぶつかりあいながら」  
岡本 英嗣（野々市町立富陽小学校・・・当時）  
一九九八年度石川支部教研障害児教育分科会報告
- ・挿し絵 川島 敏憲（辰口町立中央小学校）

## D 授業の展開例

教師の基本発問・助言	児童の活動・指導の要領
<p><b>1 導入</b></p> <p>① 題名からお話の中身を想像してみましょう。</p> <p><b>2 展開</b></p> <p>② 「しょうへいすわれ!」を読みましよう。</p> <p>③ はじめクラスのみんなはしょうへいさんをどんなふうに見ていましたか。</p> <p>④ みきさんはしょうへいさんになぜそんなに厳しくするのでしょうか。</p> <p>⑤ お話の続きを読みましよう。</p> <p>⑥ みなさんは、みきさんとひろしさんのどつちの意見に賛成ですか。そのわけも話ましよう。</p> <p><b>3 まとめ</b></p> <p>⑦ 私たちのクラスで、言ってもわかってもらえないと思つてだまつていたことや、友だちに遠慮して言わなかつたこと、おかしいと思いがらだまつていたことはありませんか。</p>	<p>① 本文を見せずに、題名のみ板書し、想像をふくらませたい。友だちに「すわれ」と言つたことがあるか考えさせるのもよい。</p> <p>② 前半部分を音読させる。</p> <p>③ クラスのみんながしょうへいさんを「やさしくしてあげなければならぬ子」「言つてもわからない子」と差別的に見ていたことをおさえる。</p> <p>④ 他のみんなとの接し方と比べながら、みきさんがしょうへいさんもクラスの一員なら座るのが当然と思つて接していることをおさえる。</p> <p>⑤ 後半部分を音読させる。</p> <p>⑥ みきさんもひろしさんもしょうへいさんを仲間の一人と認め、しんけんにしょうへいさんのことを考えていることを、わけを考えさせる中でおさえる。どちらかが正しいという答えを出す必要はない。</p> <p>⑦ 互いの本当の思いを出し合い、受け止め合う中で、本気でぶつかり合う関係をつくる糸口にしたい。単なる言い争いにならないように、なぜ遠慮していたのか、なぜだまつていたのか、正直に語らせたい。すぐに出なければ、書かせて、その後の授業で取り上げたい。</p>